

(研究ノート)

公共社会学における経験的研究に関する試論
マイケル・ブラウオイの「拡張事例研究法」に着目して

A preliminary investigation on empirical research in public sociology:
Focusing on 'The Extended Case Method' of Michael Burawoy

松 永 伸太郎*

Shintaro MATSUNAGA

1. 問題設定

アメリカの社会学者マイケル・ブラウオイは、2004年のアメリカ社会学会大会における会長講演で「公共社会学public sociology」の重要性を主張し、社会学知を学術コミュニティの中のみ閉ざすのではなく、大衆に還元していくことの重要性を示したことで知られる (Burawoy 2005)。本稿では公共社会学のプログラムと密接にかかわり、かつブラウオイ自身が重視してきた人類学由来の方法論である「拡大事例研究法」(Extended Case Method: ECM)に着目し、ブラウオイがECMを社会学に導入することで何を達成しようとしていたのかを明らかにする。

ECMは参与観察において個別状況の詳細を切り捨てることなく、共同体や社会の全体性を説明することを志向した方法論であり、社会学における有力な質的研究法の一つとして注目されている (Small 2009)。しかし、この研究法を導入したブラウオイがいかなる問題意識を有していたのかについては議論がなされてこなかった。

ブラウオイはもともと労働現場のエスノグラフィーで功績を残してきた社会学者であり、1970年代の英米圏における労働過程論争の火付け役となったハリー・ブレイヴァマン (1974=1978) へ批判的な立場で立論を行った論者の一人として、社会学界の中で知られるようになった (Thompson 1989=1990;

Smith 2015)。ブラウオイの労働現場のエスノグラフィーに関する一連の著作は、ポストコロニアリズムにおける人種秩序 (Burawoy 1972)、資本主義労働過程における搾取への労働者の同意 (Burawoy 1979)、社会主義における労働過程とイデオロギー (Burawoy and Lukacs 1992) に関するものであり、社会学方法論が主題とされてきたわけではない。

実際、ブラウオイがECMの重要性を主張し始めたのは、当人がエスノグラフィー研究を実施しなくなった1990年代においてである。つまり、ブラウオイは自らのエスノグラフィー研究を受けて、反省的にECMを導入したとみるのが妥当である。

さらに注意すべきなのは、ECMはブラウオイが独自に考案した方法論ではないということである。ブラウオイはECMについてイギリスのマンチェスター学派における人類学者マックス・グラックマンに由来するものであること (Gluckman 1961)、自身の議論は修士課程における指導教員であり、グラックマンの弟子でもあったドイツ人の人類学者ヤープ・ファン＝フェルセンを通して得たものであると述べている (Burawoy 1998)。ファン＝フェルセン自身もECMに関する方法論的論考を出版している (van Velsen 1979)。こうしたことから、ブラウオイの独自の発想を捉えるためには、人類学に由来しているECMを社会学に導入することで何を達

*長野大学企業情報学部助教

成しようとしたのかを把握することが有効であると考えられる。

そこで本稿では、ファン＝フェルセンのECMに関する議論を紹介したうえでブラウオイ自身によるその社会学への位置づけを確認する。とくに、ブラウオイがECMを導入した当初に関連する社会学方法論との比較を行っている論考における説明の論理に着目し、ブラウオイのECMが目指していたものを捉えることを目的とする。

2. 先行研究

公共社会学とECMの関係については、ブラウオイ自身がその関連性を示唆しているのみ (Burawoy 2009) で、学説史的な分析を体系的に行っている議論はほとんどみられない。

このこと背景には、労働社会学者としてのブラウオイと公共社会学者としてのブラウオイが分裂した形で捉えられてきたことがある。前者として労働過程における同意生産の議論が取り上げられ (京谷 1993; 大野 1994; 吉田 1994; 鈴木 2001; 松永 2017; 2020)、後者としては公共社会学のプログラムが取り上げられてきた (盛山 2006; 2017; 瀧川 2007)。本稿が扱う1990年代という時期はブラウオイ自身が労働社会学から公共社会学に移行していった時期であり、そこでの方法論的議論を考察することは両者の関係性を再考する道を開くうえで重要である。

ブラウオイの議論を統一的に理解する一つの道筋を開いているのが、京谷栄二による一連の議論である。京谷は、公共社会学における理論と方法論は単一な枠組みを示しておらず、ブラウオイはあくまで公共との双方向的な関係に基づいて研究を進めるという方向性を重視してきたことを指摘している (京谷 2011a)。京谷 (2010) では、自らの留学経験に基づく回顧的な記録ではあるものの、この多様性の中でブラウオイが独自に有している方法論として、40年以上にわたって実施してきたエスノグラフィー研究の反省から得られたECMがあると位置づけている。しかし、それをブラウオイ自身がどのようにして社会学の中に位置づけようとしたのかについては明らかにされていない。

本稿ではファン＝フェルセンが議論していた人類学におけるECMと、そのブラウオイの社会学への位置づけに関する論考を紹介することによって、ブラウ

ウオイがいかにして社会学独自の仕方でもECMを位置づけようとしたのかを明らかにすることとしたい。

3. 人類学における科学方法論としてのECM ——ファン＝フェルセンの議論から

本節では、ブラウオイの指導教員であったファン＝フェルセンがECMの方法論的意義を紹介した論文を取り上げる (van Velsen 1979)。van Velsen (1979) においては、マリノフスキーやラドクリフブラウンといった大家から連なるイギリスにおける人類学の潮流の中でのECMの位置づけがまとめられている。

この論考は、人類学におけるデータの利用法について方法論的な議論を行ったものである。とくに、人類学者が構築し観察の前提とする理論に対して、それに背くような例外的事例がどのように扱われるべきかという関心に貫かれている。

ファン＝フェルセンはまず、イギリスの人類学において重要な位置を占めていた構造主義学派における「構造的参照枠structural frame of reference」について言及する。この立場においては事例の抽象化が重視されており、研究対象の人間や集団が有する現実の関係性やふるまいよりもそうした人間達の社会的位置や地位が第一に考慮される。こうした視点のもとでは「個々人の行為は一般原則の中に水没する」 (van Velsen 1979: 131、以下本節内ではページのみ表記)。

この視点の問題点は、個人は異なる規範に直面し、その選択を迫られている場合もあるが、そうした事実を捉えることが分析上許されていないことである。その結果として、人類学者の立てる理論的視点からみた例外的事例は、たとえそれが無視できない程度に存在していたとしても、あくまで理論自体に影響を及ぼさない例外的なものとしてのみ扱われることになる。

こうした「構造的分析」への批判は、構造主義者が公式的・理想的な規範の一貫性を過度に強調してきたことに対して向けられた。そうした批判者達が行ったのは現実のふるまいへの過度な強調であるという。つまり、「特定の出来事や関係性はユニークなものとして扱われ、それを一般的な参照枠と関連づけることはためらう」 (137) 分析上の態度が選択される。しかし、ファン＝フェルセンによればこうした立場は、「社会人類学者は特定の社会秩序の中で生

活・行動し、確立され受け入れられている行動規範への参照をして行為しなければならない人々に関心を有する」(138)という事実を無視してしまっているという。「理想的行動規範と現実のふるまいは必然的に密接な仕方では相互の結びつきを有している」(138)。

このようにしてファン＝フェルセンは参与観察から得られるデータの過度な抽象化を行う構造主義学派とそれへのアンチテーゼとして理論化を過度に拒否する立場の両方を批判している。

こうしたデータ分析上の困難に対して提示されるのがECMである。ファン＝フェルセン自身はECMを「状況分析situational analysis」と呼ぶが、本稿においてはECMで統一する。この立場においては、「人々がいかにかにしてしばしば矛盾する規範と共に生きているか、つまり彼らがいかにかにして規範を行動させ彼らに開かれた選択を扱うのか」を理解することが重視される(139)。たとえば、妻方居住婚が規範とされている社会において例外的に夫方居住婚を選択する個人がいた場合、その個人が自らの選択を逸脱的と感じているかどうかを捉えることによって、その個別事例の固有性(個人の選択)と社会に通用する規範(妻方居住婚)を両立して議論することができるようになる。こうした方法を採用することによってECMの立場は、構造的分析よりも例外的なもの一般的なものを統合した分析を行うことを可能にするという。

以上のような方法論上の議論を行ったうえで、ファン＝フェルセンはECMにおいてはフィールドノートの記録法も対象の社会的立場や地位などだけでなく個人をはっきり特定させるなど、詳細な書き方が求められるようになるという指摘を行っている(143)。

これらのことを簡潔に確認するだけでも、ECMの議論は人類学内の方法論的な論争に埋め込まれたものであることが窺える。実際、個別状況に根ざしつつ理論的考察を伴った分析を行うという姿勢はブラウォイにも受け継がれていくことになる。

4. ECMによる社会学と社会運動の架橋 ——ブラウォイの議論から

前節で述べたようなイギリスの構造主義人類学に由来する方法論をブラウォイは社会学へと持ち込んでいくことになる。ブラウォイにおけるECMの重要

性は2009年の自伝的著作のタイトルにも現れているほか、ECMを解説した雑誌論文であるBurawoy(1998)では20年にわたってECMに関する考察を行い続けていたことに脚注で言及している。

本節では、ブラウォイが管見の限りECMについてまとめた解説を行った最初の論考であり、社会学内での位置づけを図っていることが比較的明確なBurawoy(1991)を取り上げる。この論考は、UCバークレーにおける大学院ゼミでの指導学生による論考が収録された論文集Ethnography Unbound(Burawoy ed 1991)に寄せられたものである。ブラウォイは大学院ゼミで参与観察をベースとしたエスノグラフィー教育を熱心に行っていたことをBurawoy(2009)でも回顧している。

ブラウォイによると、ECMは参与観察に向けられる二つの伝統的批判への唯一の方法論的応答であるという(Burawoy 1991: 271、以下ページ数のみ表記)。第一に一般化が不可能なため真の科学ではないという批判、第二にミクロかつ非歴史的なため真の社会学ではないという批判である。ファン＝フェルセンの議論にもあったようにECMは個別状況を捨象せず一般性を担保した分析を行うことを志向しており、二つの批判に答える方法であることは説得的であるといえる。

重要なのは社会学における位置づけである。ブラウォイは上記の批判に応答しようとしているECM以外の方法論としてエスノメソドロジー・グラウンデッドセオリー(Grounded Theory Approach: GTA)・解釈事例法interpretive case methodの三つを取り上げ、ECMとの比較検討を行っている。

これらのうちエスノメソドロジーと解釈事例法については、状況が個別的であるか一般的であるか、分析レベルがミクロかマクロかといった二項対立をそもそも棄却することによって伝統的批判の前提を否定する立場が取られているとブラウォイは整理する。両者とも「二つの批判の用語を拒絶している」(273)。

それに対して伝統的批判の前提を受け入れつつ応答を試みている立場がECMとGTAである。両者ともミクロ・マクロは分離的かつ因果的な関連性を有しており、特定の社会状況の比較から一般化を導くことが可能であるという。前節で論じたようにECMはイギリスの構造人類学の伝統に由来しており、一方でGTAはシカゴ学派の社会学に由来している。

ECMは理論の再構成を通して一般化につなげることが可能であり、GTAはマイクロレベルでの一般化からマクロを打ち立てることが可能であるという。たとえばGTAの嚆矢であるGlaser and Strauss (1965=1988)では、終末期ケアに関わる医療従事者の調査から得た知見を「認識文脈」として一般化している。

こうした見立てのもと両者の学説史的展開を概観したうえで、ブラウオイは両者の立場について表1のように項目立てた比較を行っている。

ブラウオイは表2で挙げた多くの項目においてECMとGTAの優劣について言及することはないが、唯一GTAに対して批判的議論を行っているのが「社会変化」についてである。ブラウオイによると、GTAは社会学を擁護することによって二つの関連要素

を抑圧しているという。一つはマイクロな文脈の中にある権力次元を考慮しないことである。たとえば、看護師に対する医師の権力行使や医療スタッフによる患者への権力行使が挙げられる。第二に、目下の状況において操作可能な変数に焦点化することによって、マイクロ領域における変化を制約したり支配を生みだすマクロな力を隠蔽していることである。「GTAはエイズ患者をより「効果的に」病院で扱う方法を検証することができるかもしれない一方で、ECMは次のような方法を検証するだろう。すなわちいかに国家がエイズを真摯に捉えることに失敗し、公共政策の発展を抑止し、新薬の実験を制限してきたかについてである」(282)。

「全体性の本質」の項目にもあるように、ブラウオイはECMについて議論する際には一貫して個別状

表1 ECMとGTAの比較 (Burawoy 1991: 280)

	ECM	GTA
一般化の方法	既存理論の再構築	新理論の発見
説明	発生論的 genetic	一般的 generic
比較	差異を説明する視点のもと、類似現象を扱う	類似性を発見する視点のもと、類似していない現象を扱う
有意性の意味	社会的	統計的
全体性の本質	独特なものは状況外的かつ社会を説明する文脈の中に位置する	個別状況における時間・空間からの抽象。これによって事例数に応じた一般化が促進される
分析対象	状況	変数
因果性	要素の不可分的結合	変数間の線形的関係
マイクロ・マクロ	マイクロ社会学のマクロ的基盤	マクロ社会学のマイクロ的基盤
社会変化への寄与	社会運動	社会学

況を生みだしている外的な力を捉えることの重要性を主張し続けている。GTAとのブラウォイ自身の比較からは自身の方法論の到達点として社会運動を構築しうるかどうかという点が重視されていることがわかる。実際にブラウォイは、「ひとたびシステムのな力とそれがマイクロ状況における支配のパターンを生みだし維持する仕方を強調すれば、その社会理論の適用は社会運動を組み上げることにつながる」(283)と述べている。

ブラウォイがECMを強調するための参照枠として挙げているエスノメソドロジー・解釈事例法・GTAへの批判にはそれ自体検討の余地がある部分も多い。しかしファン＝フェルセンが人類学における科学方法論としてECMの意義を強調していたのに対して、ブラウォイはそれを社会学に応用することによって社会運動の構築につながる科学知のあり方を模索しようとしていたことがここまでの検討で窺える。

実際にブラウォイは、ECMを用いたことによってEthnography Unboundという論文集が何を達成したのかについて、ハーバーマスの生活世界の植民地化論を批判しつつ説明している。ブラウォイは、福祉国家や資本主義経済といった「システム」が人々の生活世界を抑圧すると指摘するハーバーマスの議論に対して、「ハーバーマスはシステムに対抗する生活世界の反応として新しい社会運動を確かに捉えているが、彼の抵抗への分析は植民地化それ自体の過程と比較してまったくもって具体的ではない」(285)と批判する。それに対してブラウォイが論文集の意義として強調するのは、システムと生活世界、そして支配とそれに反応する人々の相互作用は動的かつ可変的だということである。

ブラウォイによれば、支配への抵抗は、システムが浸透しておりその権力の行使が見えにくくなっていることを理由として容易に振りほどかれてしまうが、Ethnography Unboundにおいては抵抗の五つの形態が見出されたという。それは以下の通りである(285-7)。

- (1) 植民地化：抵抗が不可能かつ無効なほどにシステムが生活世界を断片化・個人化してしまっている状態。
- (2) 制約の中での交渉：システムによる制約内で抑圧された人々が行動する余地を残している状態。
- (3) 代替の創出：秩序をめぐる交渉から先に進み、当事者組織の領域を切り拓くことができる状態。
- (4) 制約の再設定：システムによって課される制約を作り直す。
- (5) 集合的抗議：階級を超えたイシューへの関心に基づく、システムによる生活世界の侵食への集合的抵抗。

紙幅の関係でそれぞれの内実を詳述することはできないが、重要なのは社会集団によるシステムへの抵抗のあり方として複数のバリエーションがありうるということがECMを用いた分析によって明らかになっていることである。生活世界の植民地化を理論的に導くことはもちろん、逆に生活世界の抵抗を過大評価したり空想化することにもブラウォイは警鐘を鳴らしている(287)。「とはいえ、抵抗は存在する。我々はその多様性・源泉・制約といったものを記録していかなければならないのである」(287)と述べているように、ECMは社会運動の可能性と制約を個別の事例に則して明らかにしていくためのツールとして導入されていることがわかる。

このようにブラウォイのECMは、人類学にルーツを持ちつつ社会学と社会運動の実践を関係づけるものとして、独自に用いられていた。さらにECMを用いることの具体的な意義は、生活世界による抵抗のあり方に関するバリエーションの記述を蓄積していくことにあった。後の公共社会学においてブラウォイは大衆への社会学知の還元を推奨していくことになるが、それは公共社会学のプログラムとともに突然現れたものではなく、ECMの段階ですでにブラウォイは現実の社会問題への社会学知の関連性を、具体化し始めていたのである。

5. 結論

本稿では、ブラウォイ自身が構想していた公共社会学のあり方を描くために、労働現場のエスノグラフィに取り組みだした初期～中期キャリアにおける業績の反省として1990年代に取り上げられたECMの意義について検討してきた。すでに述べたように、ブラウォイが社会学にECMを導入した一つの重要な狙いは、社会運動の多様な可能性を描く社会学知を整備するという点にあったことが明らかになった。

ブラウオイが2000年代に提唱した公共社会学のプログラムはこうしたECMの導入と関連していた可能性がある。Burawoy (2005) は、学者向け／一般向け、道具的／反省的という2つの軸を用いて、専門社会学(学者向け・道具的)、政策社会学(一般向け・道具的)、批判社会学(学者向け・反省的)、公共社会学(一般向け・反省的)の4類型で社会学を整理し、公共社会学の重要性を主張することとなった。本稿の議論を受けると、ECMを背景とした多様な社会運動を広げる知として公共社会学を理解する道筋を開くことができると考えられる。

しかし、公共社会学のプログラムをブラウオイ自身を対象としつつ学説的に検討する作業を進めるうえではまだいくつかの課題がある。第一に、公共社会学においては聴衆となる研究対象と近い関係性を有することが重視されているが、今回の検討においてはその端緒を見出すことはできなかった。この点についてはブラウオイが1990年代後半から導入する反省的科学の概念を詳細に検討する必要がある。第二に、ブラウオイにとって労働という対象がいかなる意味をもっていたのかという点も検討する必要がある。ECMを中心に据えてブラウオイを捉えることは逆にこれまでの労働過程論争の担い手としてのイメージとは異なる存在としての把握することでもある。しかしブラウオイは自身の調査としては一貫して労働研究を行っていたのであり、それが社会運動的な観点でどのような意義を有していたのかは個別研究を詳細に検討しつつ把握する必要がある。これらの点については別稿を期することとしたい。

注

- 1) ブラウオイの日本内外の影響については、英語圏で編集されたハンドブック (Jefferies ed 2011) や、日本においては盛山・上野・武川編 (2012a; 2012b) といった論文集を参照のこと。また、研究動向の紹介としては京谷 (2011b) がある。
- 2) 具体的に取り上げられているのはクリフォード・ギアツの解釈学的方法である。
- 3) シカゴ大学はブラウオイが博士号を取得した大学である。しかしBurawoy (2009) においては、シカゴ大学で行われているエスノグラフィーには個別状況に閉じて構造や歴史を扱わない傾向があり、不満を抱えていたことが述べられている。そもそもBurawoy (2009) はUCバークレーの同

僚ロイック・ヴァカンから「シカゴ学派に対抗するためのエッセーをまとめてくれ」という要請を受けて執筆に着手したものである。バークレー社会学がハーバード大学・コロンビア大学・シカゴ大学と比較して歴史的アイデンティティを欠いてきたことはブラウオイも論じており (Burawoy and VanAntwerpen 2001)、UCバークレーのアメリア社会学会内での位置とブラウオイの業績の関係は今後検討する必要がある。

- 4) ここでの社会運動は、アラン・トゥレーヌ等が提唱する「新しい社会運動」、つまり階級対立に基づく多様な社会運動のことを指しているようである。社会運動論との関連の検討は今後の課題の一つである。
- 5) 後にブラウオイはグルドナーやブルデューといった反省的社会学 *reflexive sociology* を標榜する社会学者に学びつつ、反省的科学 *reflexive science* という概念を一つの軸としつつECMの科学的な基礎付けも試みている (Burawoy 1998; 2009)。

参考文献

- Burawoy, M., 1972, *The colour of class on the copper mines: From African advancement to Zambianization*, Manchester University Press for Institute for African Studies.
- , 1991, “The extended case method,” in Burawoy, M.(ed), *Ethnography unbound: Power and resistance in modern metropolis*, University of California Press, 271-287.
- , 1979, *Manufacturing Consent: Changes in the Labor Process under Monopoly Capitalism*, London: The University of Chicago Press.
- , 1998, “The extended case method,” *Sociological Theory*, 16(1): 4-33.
- , Michael, 2005, “For public sociology,” *American Sociological Review*, 70(1): 4-28.
- , 2009, *The extended case method: Four countries, four decades, for great transformations, and one theoretical tradition*, University of California Press.
- Burawoy, M.(ed). 1991, *Ethnography unbound: Power and resistance in modern metropolis*, University of California Press.

- Burawoy, M. and J. Lukacs, 1992, *The radiant past: Ideology and reality in Hungary's road to capitalism*, University of Chicago Press.
- Burawoy, M., and VanAntwerpen, 2001, "Berkeley Sociology: Past, Present and Future" <http://burawoy.berkeley.edu/PS/Berkeley%20Sociology.pdf> (accessed May 21, 2020).
- Gluckman, M., 1961, "Ethnographic data in British Social Anthropology," *Sociological Review*
- Jefferies, V. (ed), 2011, *The handbook of public sociology*, Rowman & Littlefield
- Glaser, B. and A. Strauss., 1965, *Awareness of dying*, Aldine Transaction. (=1988, 木下康仁訳『「死のアウェアネス理論」と看護：死の認識と終末期ケア』医学書院.
- Small, M., 2009, "How Many Cases Do I Need?: On Science and The Logic of Case Selection in Field-based Research" *Ethnography*, 10(1): 5-38.
- Smith, C., 2015, "Rediscovery of the Labour Process," in Edgell, S., H. Gottfried and E. Granter (eds.) *The Sage Handbook of the Sociology of Work and Employment*, Sage, Los Angeles: 205-224.
- Thompson, P., *The nature of work: An introduction to debates on the labour process*: Macmillan (= 1990, 成瀬龍夫・青木圭介訳『労働と管理——現代労働過程論争』啓文社)
- van Velsen, J., 1979, "The extended-case method and situational analysis," Epstein, A.(ed), *The Craft of Social Anthropology*, Pergamon Press: 129-149.
- 京谷栄二, 1993, 『フレキシビリティとは何か——現代日本の労働過程』窓社.
- , 2010, 「マイケル・ブラウオイの軌跡——労働社会学からパブリック・ソシオロジーへ」『長野大学紀要』特別号第2号: 103-132
- , 2011a, 「パブリック・ソシオロジーをめぐる国際論争」『長野大学紀要』33(1): 17-28.
- , 2011b, 「テーマ別研究動向(パブリック・ソシオロジー)」『社会学評論』62(2): 224-235.
- 松永伸太郎, 2017, 『アニメーターの社会学——職業規範と労働問題』三重大学出版会.
- , 2020, 『アニメーターはどう働いているのか——集まって働くフリーランサーたちの労働社会学』ナカニシヤ出版.
- 大野威, 1994, 「労働過程論争における主体概念の検討」『ソシオロギス』18: 15-29.
- 盛山和夫, 2006, 「理論社会学としての公共社会学にむけて」『社会学評論』57(1): 92-108.
- , 2017, 「公共社会学は何をめざすか——グローバル化する世界の中で」『社会学評論』68(1): 2-16.
- 盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編, 2012, 『公共社会学Ⅰ——リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会.
- , 2012, 『公共社会学Ⅱ——少子高齢社会の公共性』東京大学出版会.
- 鈴木和雄, 2001, 『労働過程論の展開』学文社.
- 瀧川裕貴, 2007, 「公共社会学論争の検討——社会的規範理論の定立に向けて」『ソシオロギス』31: 20-39.
- 吉田誠, 1994, 「労働過程における主体分析の枠組——統制・抵抗パラダイムを超えて」『一橋研究』19(1): 131-160.